

Report on Clinical Elective at National Taiwan University Hospital (NTUH)



Momo Sakuma

**Final-Year Medical Student
Fukushima Medical University**

2026/6/22-7/17

はじめに

2026 年 6 月 22 日から 7 月 17 日までの 4 週間、台北市にある国立台湾大学(NTU)に留学する機会をいただきました。私は海外旅行で国ごとの文化の違いを感じるのが好きで、将来は自分が志す分野の発展のためにも留学をしたいと考えています。今まで大学在学中に留学に挑戦する機会がありながらも英語力で躊躇していた私ですが、「やらない後悔よりやる後悔」と思いこの留学に応募しました。このレポートでは、実習内容や現地での生活を中心に、私が留学を通して感じたことをまとめました。今後留学を希望する方々の一助となれば幸いです。

実習内容

① 病理科での実習

最初の 2 週間は病理科で実習を行い、病理専攻医の日常業務を見学するとともに、神経病理学および法医病理学を専門とする Chang 先生に毎日 1:1 で講義をしていただきました。私が法医病理学に興味を持っていることをお伝えしたところ、台湾の法医学制度や、2023 年に開始された Brain Bank プロジェクトについて詳しく説明してくださいました。

国立台湾大学病院(NTUH)では、病理専門医の研修は 4 年間ですが、法医病理専門医との統合プログラムを選択した場合は、5 年間の研修を通して両方の専門医資格を取得できる仕組みとなっているそうです。

実習では病理解剖にも参加し、病理解剖が実際にどのように行われるのかを間近で見学する貴重な機会を得ました。また、日本と台湾におけるがんゲノム医療の違いについても学びました。日本では、標準治療が終了した進行固形がん患者を対象に包括的ゲノムプロファイリング検査が保険適用となっていますが、台湾では保険適用の有無ががん種によって異なることを知りました。

<リアルな感想>

実習の 1 日目に Chang 先生から講義をしていただいた際に、わからない単語がたくさん登場して講義の概要すら理解できず、自分の英語力でこの先 4 週間やって行けるのだろうかとても焦りました。とにかく Chang 先生が脳神経病理の専門の方なので脳の解剖に関する英単語だけでも覚えようと、毎日帰ってから必死に勉強しました。するとだんだん講義の内容が理解できるようになり、内容に関する質問もできるようになりました。医療英単語の量は膨大なので、留学前にすべて覚えることは難しいと思いますが、自分がまわる科に関する単語を勉強してから臨むことと、留学中に出てきた知らない単語を拾っていくことが大切だと感じました。

② 救急科での実習

後半の 2 週間は救急科で実習を行い、主に重症患者診療室(Critical Care Room)において、重症患者の診療や蘇生の現場を見学しました。特に急性期脳卒中患者を診療する機会が多く、患者の評価から治療に至るまでの一連の流れを学ぶことができました。また、台湾では TTAS(Taiwan Triage and Acuity Scale)が導入されており、看護師が患者のバイタルサインや主訴を評価した後、コンピュータシステムを用いて緊急度を 5 段階に分類するトリアージシステムについて学びました。

実習を通して、日本との医療体制の違いも多く感じました。その一つが家族の関わり方です。重症患者診療室においても家族が患者のそばに付き添い、日常生活の介助を担っている場面が多く見られ、日本との違いが印象に残りました。

また、救急医とともに院外での教育活動に参加する機会にも恵まれました。1 回目は Lin 先生に同行し、宜蘭県の羅東博愛医院进行して、地震・火災を想定した災害訓練や避難訓練を見学しました。自力で避難できない患者を搬送するために必要な人員配置や、エレベーターが使用できない状況で安全に避難させる方法など、災害時には平時からの綿密な計画が重要であることを学びました。

2 回目は Cheng 先生に同行し、国立成功大学で開催された放射線災害医療に関する講義を受講するとともに、国立成功大学病院の救急部を見学しました。放射線災害に対応できる救急救命士(EMT)の育成の重要性を学んだほか、救急部には新型コロナウイルス感染症や結核などの感染症患者に対応する設備に加え、CBRNE(化学・生物・放射線・核・爆発)災害を想定した設備も整備されていました。また、日本と比較して、台湾では有事を見据えた医療体制の整備や教育がより重視されていることも印象的でした。



写真1:救急科の Cheng 先生と



写真2:放射線災害時の PPE

さらに、実際の蘇生対応を録画し、その映像をもとに救急チーム全体で振り返りを行うデブリーフィングにも参加しました。デブリーフィングでは、良かった点だけでなく、スタッフの立ち位置や声かけのタイミングなど改善点についても活発に議論が行われていました。実際の症例を用いてチーム全員で振り返るこの教育方法は、医師や看護師だけでなく医学生にとっても非常に学びの多い取り組みであると感じました。

<リアルな感想>

救急科の先生や看護師さんは、私たちが充実した実習を経験できるよう常に気を配ってくれました。ライングループでいつでも質問できる環境を作ってくださり、実際に疑問に思った内容を送信するとすぐに詳しい解説をしてくださいました。さらに、雑談で「私たちのホテルに蟻が出たんですよ」と言ったところ、次の日には強力な蟻退治の薬を用意してくださり、あまりのホスピタリティに感動しました。



写真3:いただいた蟻退治のお薬

病理科と救急科の両方で、医療職の方の英語力がとても高いことを感じました。NTU では医療の勉強を英語で行っているそうで、私たちに対して流暢な英語で患者さんや治療に関する説明をしてくださいました。この英語力の高さゆえに NTU は留学生を多く受け入れることができ、さらに NTU の学生の多くが海外留学に行く理由の一つだと感じました。

留学中の生活や NTU 学生との交流

私たちは4人で留学に行きました。宿泊費を安く抑えるために Airbnb で部屋を借り、女子3人で1部屋、男子1人で1部屋を使いました。一緒に留学した同級生と毎日話すことで、それぞれがまわっている科の情報を交換したり、「明日はこれを頑張ろう」とお互い励まし合ったりすることができました。私たちが借りた部屋は中山駅の近くにあり、地下鉄が頻繁に走っているので通学にかかる時間も短く、飲食店やドラッグストアなども多くあってとても便利でした。

また、意外と盲点だった必需品は爪切りです。1か月で爪はかなり伸びますので、日本から持

っていくことをお勧めします。私たちは誰も持って行かなかったので、安いものを 1 つ買って 4 人で使いました。

台湾は自炊をせず、朝昼晩と外で食べる人が多いようで、飲食店は充実しています。実習先の先生や看護師さん、学生さんにおすすめのお店を聞いて行ってみると安くておいしいご飯が食べられるので良かったです。また、台湾はプラスチックの容器やスプーンはお金がかかることが多く、日本よりもマイタンブラーやマイ箸を利用している人がたくさんいたのが印象的でした。

大学病院での実習だけでなく、NTU の学生さんのおかげで放課後や休日にも充実した時間を過ごすことができました。2週目の週末には学生さんたちがレンタカーを借りて台湾の北の方にある基隆(Keelung)という所や、台中の地域にも連れて行ってくれました。観光ではなかなか訪れることのできない場所に行くことができ、さらに英語でお互いの国の違いや趣味の話などをたくさんすることができました。その後も放課後に夜市やカラオケ、バドミントンなど様々なことを企画してくれて毎日充実した時間を過ごすことができました。



写真4:バドミントン



写真5:臨江街観光夜市



写真6:台中の高美湿地



写真7:お世話になった NTU 学生と

まとめ

冒頭にも書きましたが、今までためらってきた留学に思い切って挑戦してみて良かったと思っています。もともと美味しいご飯や優しい現地の方のおかげで好きな国だった台湾がこの1か月でさらに大好きな国になりました。特に日本ではなかなか食べられないマンゴーをいっぱい食べられたのが幸せでした。

そして私は一緒に留学に行く同級生の存在が大きいと感じました。たとえ英語が得意であっても、コミュニケーション能力が高くても、慣れない地で実習をするのは気を張って疲れが出ると思います。私はうまくいかないことも多く、焦りや不安を感じることがありましたが、そんな時に日本語で相談できる相手がいるのは心強かったです。留学に行くことが決まった人は、日本にいるうちから仲間と交流して、仲良くなっておくといいと思います。

今回の留学に関わってくださった皆様、改めて深く御礼申し上げます。

お世話になった方々

- ・福島県立医科大学薬理学講座 下村健寿 教授
- ・福島県立医科大学輸血部 Kenneth E Nollet 教授
- ・福島県立医科大学放射線健康管理学講座 坪倉正治 教授
- ・福島県立医科大学糖尿病内分泌代謝内科学講座 島袋充生 教授
- ・国立台湾大学病理部 張克平 教授
- ・国立台湾大学 鄭銘泰 救急・災害医療主任医師
- ・国立台湾大学救診医学部 林鍵皓 主治医氏
- ・国立台湾大学国際事務局の方々
- ・福島県立医科大学企画財務課 増井奈津美 様
- ・福島県立医科大学国際交流センター 嶋本雅子 様
- ・その他お世話になった方々

心より御礼申し上げます。